鉄道を破壊し、電信を切断し、やがては北京に乗りこみ、官兵もこれに加って、北京にある外国公使館を焼打ちして外人を皆殺しにしようとした。ドイツ及び日本の公使館は遂に暴徒に包囲されて危険な事態となった。この時、当時衆議院議員であった先生の令弟小栗貞雄氏も、事業視察のため天津に来ていたが、たまたまこの騒乱にまきこまれ、暴徒の囲みの中にあった。

北京の形勢が険悪になると、各国公使は自国の水兵を上陸させて防衛にあたらせたが、雲霞の如き義和団に対抗し得る大軍を、手近く出兵できるのは日本より外にない。龍溪先生はこの暴徒を鎮めるため三万の兵を派遣するよう山縣総理に進言した。山縣も軍人上り、すぐ先生の言葉通り三万ばかりの兵を繰り出した。このとき「報知新聞」からは従軍記者として、佐藤紅緑が派遣された。

この事件は幸いにも　七月十四日先ず天津の囲みがとけて令弟は助かり、八月十六日には北京も陥落して、公使館の全員が無事に救助されたので、先生もはじめて愁眉を開いた。

（この項終り）

研究

土佐堅田氏と佐伯氏

会員　佐藤　貫一

さきに、高知県須崎市の堅田勇氏から、佐伯市教委の加藤氏あてに「土佐堅田氏」に関する史料や、土佐堅田氏と佐伯氏に関する考察について、佐伯地方の伝承や佐伯氏関係史料との比較研究を設問されてきた。私は加藤氏からこれらの史料と考察を借覧し、私なりに検討した。

堅田氏から送られてきた史料のうち「土佐名家系譜」の抜粋「堅田氏系譜」はいわゆる一般史料で、私たちが容易に手にすることができる諸家系譜である。堅田氏系譜は堅田氏の起元を佐伯・堅田氏に求め、

高岡郡に佐伯・堅田・緒方の三氏あり。実は一系にして神別大神氏に属し、日本有名の巨族なり。豊後の国に発し、各派流れて土佐国に遷移す。而して其の根本は緒方氏なり。

とし、和名抄、三代実録、本朝世紀、平家物語などを引き、大神姓佐伯氏系図の略系図を載せている。佐伯地方にある大神姓佐伯氏系図の巨とんどは、祖母岳大明神の神子大神惟基を始祖とするが、堅田氏系図にていてある大神系図は、三代実録によって大神朝臣豊後介良臣を始祖とし、大野郡大領で大神惟基の父といわれる大神底綱と、本朝世紀の佐伯是基を同一人として記載している。そして註記して「按ずるに佐伯氏末流堅田氏となる。而してその分立は鎌倉弘安時代に在り」と説明し、次に弘安の豊後図田帳から佐伯弥四郎政直、佐伯八郎惟資、堅田左衛門三郎惟光の名を列記、さらに佐伯氏系図から方田（堅田・片田）左衛門惟定・惟保・惟景・惟長の堅田氏歴代を記載して、問題の人物、土佐堅田氏の祖堅田小三郎佐伯恒貞なる人物と、どのように結びつけようかと苦心している。しかし結局、佐伯氏支族の堅田氏と土佐堅田氏とを結びつけることは難しく、次の堅田小三郎佐伯恒貞の項には「恒貞祖先、来国の時代は未詳、其の津野新庄を領し、足利氏に属すを見れば、来時は蓋し鎌倉末時なるべし」と記入し、どこから来たとも記していない。

ところでこの堅田小三郎佐伯恒貞であるが、佐伯文書（佐伯経貞軍忠状など）には経貞とあり、日本地名大事典、高知県の歴史等には佐伯経貞となっている。堅田氏

氏は郷土史家寺石杜山氏の「南北朝時代歴史人物佐伯経貞」という一文のコピーをよせているが、それには豊前出身の司法官長立維孝氏の土佐堅田氏に関する説がでている。

佐伯氏（経貞）は本国豊後海部郡佐伯庄堅田村、栖年礼城主大神姓（紋所三巴）堅田小三郎佐伯維貞なりと存じ候。南北朝の時、豊後守護大友氏の幕下に属し、武家方の急先鋒たりき。故に土佐国に渡り、同志を指揮又は糾合して、宮方に抗したるならん。

寺石氏はその昔高知・大阪など各地の裁判所検事正をつとめた顕官長立氏が豊前出身で、しかも大神姓の後裔というので、この説を信じ、佐伯経貞は佐伯維貞の誤写であるとした。（なお長立氏の書簡抜粋には、佐伯惟定が伊勢の津に移り、藤堂氏に仕え、その後孫が佐伯惟富と称している＝明治末期＝と記述してある。）

堅田小三郎経貞宛

今月十日、三宮、津野人々、打出候。対二山徒等一被レ致二合戦一之間、同十三日馳二参高岡館一令二着到一、同十八日一官合戦之時切捨仕抽二軍忠一、同廿一日於二大高坂城一、馳二向大手一、致二合戦一之処、弓手小カイナヲ、被レ射畢、其次第三宮、津野人々、検地之上者、賜二一見状一、可レ備二後日之証一候、以二此旨一可レ申二神妙露一候、恐惶謹言。

建武三年二月廿二日　　佐伯経貞

進上　御奉行所

承了　家時　判（津野氏）

全文一通加二見知一候畢　頼国　判（三宮氏）

これは堅田氏系譜にある佐伯経貞の申条で、経貞は津野氏に属していたようである。

「高知県の歴史」によると当時の状態は

南朝方の中心勢力は大高坂城を根拠とした大高坂松王丸で、このほか高岡郡の佐川付近を本拠にした河内光綱、尾川城の近藤知国や斗賀野又太郎がいた。北朝方は細川氏の統率のもとに、香宗城の香宗我部氏、岡豊城の長宗我部氏、高岡郡では津野荘の領主津野家時、日下の領主三国頼国、黒岩の領主片岡経義、久礼の領主佐竹義国、新荘の領主堅田（佐伯）経貞らがあった。

つまり堅田小三郎佐伯経貞は、津野家時に属して足利方の武将として戦っていたようだ。

堅田小三郎佐伯経貞は実在の人物であるが、果して大神姓佐伯氏の一族であるかということになると、疑問符をつけなくてはならない。たしかに佐伯一族には片田（堅田）氏があり、国東方面にも所領をもち大友氏に属していたが、この堅田氏（忠左衛門尉惟景）の後は田北氏を名乗っている。惟貞または維貞という南北朝期（建武・暦応・康永の頃）の人物には大野郡三重郷に住んだ佐伯讃岐守惟通の族佐伯次郎惟貞があるが、これは市辺田八幡宮の創祀者である。建武中肝付八郎兼重の討伐に従軍した惟貞は、敗軍のとき祖母岳高千穂の十社大明神に祈願して、ようやく勝ち肝付氏を敗ることができた。惟貞は自領三重郷に帰ると十社大明神のうち八幡大菩薩を赤峯の地に勧請した。これが市辺田八幡宮であるという。

堅田小三郎佐伯経貞がもし大神姓佐伯氏の族であるならば、堅田小三郎大神経貞（又は維貞）と称したはずで、また佐伯氏を名乗る場合は佐伯小三郎大神経貞でなければならない。堅田小三郎の堅田氏は苗字で、本姓は佐伯氏であろう。佐伯氏で四国にあるものは僧空海（弘法大師）を出した佐伯直氏であり、これは後に佐伯宿祢となった。伊予にあった佐伯は安芸の佐伯宿祢氏、神別大伴氏から出ている。堅田の地名は全国的であるから、各姓が苗字にしたとみてよい。

（おわり）